



[今月の聖書]

C20・10『神前静寂』

聖歌隊の指揮者によって女の声のしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌

神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れぬ。たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、そのさわぎによって山は震え動くとも、われらは恐れぬ。〔セラ 一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。神がその中におられるので、都はゆるがない。神は朝はやく、これを助けられる。もろもろの民は騒ぎたち、もろもろの国は揺れ動く、神がその声を出されると地は溶ける。万軍の主はわれらと共におられる、ヤコブの神はわれらの避け所である。〔セラ 来て、主のみわざを見よ、主は驚くべきことを地に行われた。主は地のはてまでも戦いをやめさせ、弓を折り、やりを断ち、戦車を火で焼かれる。「静まって、わたしこそ神であることを知れ。わたしはもろもろの国民のうちにあがめられ、全地にあがめられる」。万軍の主はわれらと共におられる、ヤコブの神はわれらの避け所である。〔セラ (詩篇 46)

さてその日、夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。そこで、彼らは群衆をあとに残し、イエスが舟に乗っておられるまま、乗り出した。ほかの舟も一緒に行った。すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。ところが、イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。(マルコ 4:35-41)

お元気でお過ごしでしょうか。今月のテーマは「神前静寂」詩篇 46 篇の学びです。マルティン・ルターが宗教改革の最中に作詞作曲した讃美歌「神は我がやぐら」の主題となった聖書です。プロテスタント信仰が聖書に立脚して改革を進めようとしたときに、それまでの古い体制との間に大きな摩擦が生じました。ルター自身も何度も死を覚悟するような危険な中にありましたが、神の守りを強く信じることができたのです。それはひとえにこの詩篇 46 篇のみことばの約束に寄っていました。詩篇は私たちに神の約束の言葉を与えてくれます。そしてそれを口ずさみ歌う時、恐れは吹き払われ、新しい力がみなぎってきます。不安な時代に生きる私たちは、聖書の御言葉と聖霊の命の流れによって恐れることなく問題に立ち向かうことができます。これは信仰のなせるわざです。今月もあなたの生活と健康が、御言葉の約束によって守られますようにお祈りしています。

(お知らせ)

*コロナウイルス感染拡大のため、引き続き地区集會はお休みになります。自由が丘チャペルにおいても日曜日の礼拝を除く全ての集會はお休みになっています。

テレフォンサービス 03-3717-5108、YouTube チャンネルからの動画配信などをご利用ください。

LIGHTHOUSECFI YouTube チャンネル



左の QR コードをスマートフォンやタブレットで読み取りますと LIGHTHOUSECFI の YouTube チャンネルが開きます。チャンネル登録していただければ今後配信される動画が簡単にご覧いただけます。

*「ダビデの宝石」(詩篇の学び)が 10 月 10 日に出版されます。昨年の「今日の聖書」の第二集です。祈りの生活に新たな光を投じる新鮮なみ言葉集です。ぜひご利用ください。(60 ページ。フルカラー。1000 円税別)

本冊子、「書」の章、62に載せた「清寂」を書いた時のことを私は書き記しておきたいのです。その時の本人は起き上がることも難しく、介護ベッドのテーブルにやつと向かえるという状態でした。墨をすり筆を渡すと、一気に「清寂」の二文字を三枚書き上げました。お茶を習い始めた息子のために茶掛けを書く、との約束を遂に果たしたのです。その八日後に世紀子は息を引き取りました。死を前にして、あのような力がどこからきたものか。世紀子が最も力を注いだのは音楽でした。未だ学校に上がる前のこと、小学校の教員であった母親が台所仕事をしながら唱歌を階名で歌うのを聞き覚え、自分でも階名で歌えるようになった、と話しておりました。

句・書・楽

鈴木世紀子の



息子、謙の為に書いた茶掛「清寂」



一方、ベートーベンの「第九」やヘンデルの「メサイア」の合唱の一員として何度も参加しました。残っている写真から数葉を載せました。

俳句と書道と音楽、これら三つを合わせると鈴木世紀子の生きた軌道が見えてくるのではないだろうか。さらには、これら三つのそれぞれの場での出会い、お交わりいただいた方々との関わりにも繋がるのかもしれない。

二〇二〇年七月二十二日、一年前のこの日、
主のみもとに召された世紀子を思いつつ

鈴木 進

病むことの祈りにも似て散る桜

ハレルヤとうたいつつ天翔けて逝く